

朝の読書

2023.7.6

「朝の読書」というものがある。野田中学校でも行っている。現在、朝の読書を導入している小学校、中学校、高等学校は、全国で27000校にも上る。これは、日本全国の7割超にあたる。いまや、朝の読書は、すっかり定着し、当たり前の光景になっている。なぜここまで普及したのだろうか。

ある高校の先生の話である。高校2年生に履歴書を書かせてみた。名前と住所しか書いていない。部活動も資格・検定も趣味もない。これは何とかしなくてはいけない。せめて読書くらいは身につけさせようと読書に力を入れるようになる。

手始めに『走れメロス』や『蜘蛛の糸』などを読んであげると、生徒は大いに喜んでくれた。私費で小説や伝記など、いろいろな本を160冊ほど取り揃えて教室の書棚に並べた。週1回のロング・ホームルームで、読み聞かせや黙読をしたところ、驚くことに生徒たちの成績がグングン伸びていった。紆余曲折を経て、学校で実際に朝の読書が始まると、学校は大きく変わった。遅刻者が大幅に減った。それまで1日に50人、100人が普通だったのが、姿を消した。

朝の読書は、とてもシンプルな読書である。だから、無理なく生徒たちに学校に受け入れられた。以下が4つの原則である。感想文や記録は求めない。

- 1 毎日やる
- 2 皆でやる
- 3 好きな本でよい
- 4 ただ読むだけ

この効果は大きく、生徒に集中力がつく、自信と思いやりの気持ちが芽生える、教師と生徒、両親の間の会話が増えるなど、劇的ともいえる変化が見られるようになる。

私個人としては、これほどまでに朝の読書が普及していることに驚きを感じている。それも長年にわたって継続されている。学校の先生方が、何かしらの効果や意義を感じているからだろうと思う。一番は、授業開始前の学校中を包む静寂だろうか。生徒が、みんな目の前の本に集中している。見事な光景である。

朝の読書が、全国的に広まったきっかけは、1988年の高校の先生による提唱・活動である。前述の先生もその一人である。この先生は体育教師である。読書時間は、10分から15分である。生徒が持参した、あるいは学級文庫の中から選んだ本を読む。

これだけ、朝の読書、朝読（あさどく）は定着しているのにもかかわらず、子どもの読書離れが進んでいるというのは、どういうことだろうか。きっと、朝読以外では読まないということなのだろう。朝読をやっている以上、1か月に1冊も読まない、全く読書をしないということはあるはずである。朝読が続いているのはいいが、ポイントは、教室にいる教師も一緒に読むという姿勢だろう。先生方も、一緒に読めばいいのにとと思う。先生方の読書離れも心配である。